

大野城跡

大野城は、665 年に大宰府のすぐ北にある四王寺山に築かれた大規模な要塞である。博多湾に近づく船を一望することができる山頂の陣屋を 8 キロに及ぶ土と石の壁が囲んでいた。朝廷は、外国の侵略から国を守るため、この戦略的要地に要塞の建設を命じた。すぐに他の山城が続くが、大野城は日本最古の山城である。

6 世紀から 7 世紀にかけて、日本（当時は「倭」と呼ばれていた）は朝鮮半島の百済王朝（～660 年）と友好関係にあり、文化的な交流を享受していた。しかし百済の政情は安定を欠いていき、663 年に日本と百済の残党は、中国の唐（紀元前 618～907 年）と同じ朝鮮半島の新羅（～935 年）の前に悲惨な軍事的敗北を喫した。当時、唐はアジアで最も先進的な文明国であり、日本は技術的にも戦術的にも大きなハンデを抱えていた。敵はより優れた鉄製の武具と、日本ではまだ珍しかった軍馬や弩を豊富に持ち、優れた軍船も持っていた。

663 年の敗戦は、外国船が最もやって来そうな場所である大宰府周辺地帯に大規模な要塞を築くように宮廷の上位者達を駆り立てた。この頃の他の防衛インフラとしては、博多湾と太宰府の間に 1.2 キロの土塁を備えた水城や、2 つ目の山城である基肄城などが見られる。

大野城は、百済から亡命してきた貴族の技術と指導によって築かれたもので、百済の都の山城を踏

襲した。作業員はまず地面を平らにならし、穴を掘り、盛り土をする部分の周囲に木の板壁を設けた。土砂を注ぎ、一層ずつ踏み固めていったものを、この板が留めた。要塞を取り囲む城壁の大部分もこのような強く固めた土で築かれたが、谷間には高さ 3 メートルから 8 メートルの石垣が築かれた。谷に向かって流れる湧き水や小さな川がしばしばあったため、城壁には水を逃がすための暗渠や岩の隙間が設けられた。これまでに発掘調査によって 9 つの門、約 70 の建物（主に 8 世紀以降に建てられた倉庫）、本営だったと思われる中央の建造物が発見・発掘されている。

結局、侵攻はなかったが、大野城は 10 世紀頃まで有人であった。大野城の築城は、日本最初の広範囲に及ぶ国防政策の取り組みを代表するものであった。また、大野城の築城に大陸の建築技法が用いられたことは、当時の太宰府周辺で文化や技術の交流が行われたことを示す多くの痕跡のひとつである。